

独自の文体を貫いた 今官一

独自の文体で小説を書き、「コンカン」の愛称で読者に親しまれ、第三十五回直木賞を受賞した作家、今官一は、小説を書く己れの姿勢を次のように述べている。

私は小説というものに心惹かれ、自らもその実作者となって筆を弄するようになってから、たった一つのことだけを目指して筆をとって来た。私は、なにごとによらず、物ごとが不当に扱われることを好まないで、力をつくして、それらの処遇を正当化することを、私の小説活動の唯一の目標にして来た。悪でないものが、悪として処遇されたり、善でないものが善であるように評価されたりする不当な扱いを、正当に評価し、出来れば正当に是正したいと、どんな小さな書きものにも私は心をこめて、努力して来たのである。私の小説など、めったに読んでももらえないので、そういつても判ってもらえないだろうが、読んで頂ければ、私の小説に一貫した「主題」として、そのことは納得して貰える筈である。（『手前味噌で壺えた大塚甲山論』）

右の言葉の通り、今官一は、彼自身の「主題」を、生涯、枉げることのなかった稀有の作家であった。「主題」ばかりではない。文章にお

いても、枉げることがなかった。官一は「私の小説など、めったに読んでももらえない」といつているが、それは、彼が自分の言葉や文体を大事にし、絶対に妥協を許さなかったからである。彼独自の文体は、ある読者にはしゅぎよく珠玉の名文と好まれたが、ある読者にはかいじゆう晦渋の文章として敬遠された。それだけに、官一に対する出版社の注文は多くなかった。しかし、彼はそれに屈することなく、一貫して、その姿勢を変えることがなかった。

そして、その不変の姿勢が、名作といわれる『おお巨いなる樹々の落葉』『げんかこう幻花行』『かべ壁の花』『牛飼いの座』を生んだのである。

今官一は、一九〇九年（明治四十二）十二月八日、弘前市西茂森町八拾壹番戸、曹洞宗ちんていじん蘭庭院において、父官吾、母さだの長男として生まれた。父官吾は南津軽郡藤崎町舟場、藤田三次郎の三男で、蘭庭院住職の今ちようらん晃運の婿養子となり、その娘さだと結婚した。官吾、さだには、官一のほか、姉の正代、弟の勝雄、礼三、妹の春代、しげ、がいた。

父の官吾は国鉄職員で、奥羽線に乗務していた。家庭的で、子ぼんのう煩惱な父親であった。当時としては、大変ハイカラな父親で、クリスマスのときなど、子供たちにたくさんのプレゼントを持って帰ったという。

母のさだもやさしい人で、幼児のころの官一は、いつも母のうしろにくっついて歩いた。官一は晩年まで、母から教わったそば蕎麦まんじゅう

や草もちの作り方を知っていて、それを夫人に教えるほどだった。後年、官一は「母の灯り^{あか}」という文章を書いているが、幼児のころの官一と母との、心の交流がうかがわれて胸をうたれる。

細い竹の枝のさきに、糸でつるした「金魚ねふた」を、後生大事に片手にかざしながら、母の背に負われて、暗い、お城下のお濠ばたの道を、息づまる思いで通った記憶がある。目をつむると、いまでも、それが暗いお濠の水のように淀^{よど}んだ、暗い眼^まぶたのうらの闇に、小さな赤い光の点になって、小ささみにゆれながら、ちらちらと浮かんでみえるのだ。

母は、私に、それは提灯^{ちようちん}のかわりに、かざさせていたのかもしれない。津軽では、母の背を必要とする、そんな年ごろの子供たちが、灯りの点^{とも}る、「金魚ねふた」を持たされることなどめつたにないことだからである。構造がちがっていた。中に蠟燭^{ろうそく}を立てることの出来る「金魚ねふた」には、金魚の腹のところ、それを操作するための、小さな切りこみが出来ていたが——灯りの点らない「金魚」は、死んだ魚のように、のっぺりした白い腹をしていた。

けれども子供たちが泣いたりせがんだりして「生きたねふた」を欲しがると、「死んだねふた」のように乱暴に扱わないことを条件にして、灯^{あか}りの点^{とも}る「ねふた」を持たせてくれた。

「しっかりと、つかむんですエ。落とすんでへえんねエ——落とせば、ぼうつと燃えて、なくなってしまうんですエ」

子供たちは、落とすまいとして、それを、小さな手のひらが、汗ばむほど、しっかりとにぎりしめる。母の心配そうな顔が、いつも、その光のなかにある、やがて、子供たちが一人で歩けるようになって、もっと勇ましく、もっと大人っぽい武者絵の「扇灯籠」を欲しがるようになるまで、それはつづくのである。

落とすなといったのは、どんなに落とすまいとしても、いつかは次第にうすらいで行く、あれは母の灯しびだったと、いま私はそれを了得している。津軽に生まれて育ったものたちにとって、いうならば「金魚ねぶた」は遠く老いし「母の灯」——in the valley なのである。

このように、官一は両親の愛につつまれ、幸福な幼年時代を過ごしたが、小学校に入学するころになると、父の転勤で、各地を転々とする。

一九一六年（大正五）四月、官一は岩手県の一戸尋常小学校に入学するが、翌年一月、弘前に帰って、朝陽尋常小学校に転入学する。それも束の間、半年後には青森市新町尋常小学校に転入学、一九二二年三月同校を卒業する。

その間、官一は土地の子供たちから「官舎の子」と呼ばれて、余所者扱いを受けた。普通そのような扱いを受けると、心がいじけてしまうものだが、官一は違っていた。彼はその土地にしばらくられない自由な立場でものを見、とらわれない考え方を持つようになった。そして、小学

生の時から、文学者になろうと心に決めていた。

一九二二年（大正十一）四月、小学校を卒業した官一は、弘前の東奥義塾に進学する。

東奥義塾は、それまで廃校になっていたが、この年、ミッションスクールとして再興されたのである。塾長は、アメリカ遊学を終えて帰朝した笹森順造で、三十六歳の若さであった。笹森は、日本の武士道とキリスト教主義を組み合わせた教育を実施しようと、小学校の成績証明だけによる入学の許可、成績別クラスの編成、メンタルテストの実施、単位時間の採点、背広服の着用とネクタイの色による学年の分け方など、斬新な教育を打ち出した。

笹森の教育方針に共鳴した親たちは、県内各地からその子弟を入学させたが、今官吾もその子官一を、東奥義塾に入学させた。

義塾入学の面接試験のとき、笹森塾長は官一に、

「きみは将来、なんになりたいかね。」

と尋ねた。官一はすかさず、

「自分は文学者になりたいと思います。」

と答えた。この答えに、さすがの笹森も驚いてしまった。というのも、そのころの学校や親たちは、小説など読む子にろくな者がない、と

考え、学校によつては、生徒に小説を読むことを禁止していたからである。そういう時代に、「自分は文学者になりたいと思います。」と平然と喋つてのけた官一の自主自立の精神に、笹森は驚くと同時に感心した。

笹森は、終生そのときのことを覚えていて、官一に向かつて、お前は文学者だから、ああいうことをしてはいかん、こういうことをしてはいかん、と忠告したという。

また、笹森塾長は雄弁家で、なにかにつけて演説をした。それが名演説なので、生徒たちは圧倒された。卒業式の演説で「誰か人あつて、コンゴの野に自由の鐘を鳴らさん」という一句があつた。官一はこの言葉を忘れず、「大正末年の中学生には、コンゴが、いったいどこにあるのか、わからなかつたが、その言葉に、胸が高鳴つたものだ。」と、のちに述懐している。良き教師にめぐり会えたというべきであろう。そのほか、官一は東奥義塾において、英語力を培い、聖書に精通したが、それらは後年、官一の文学に色濃く反映している。

一九二五年（大正十四）秋、官一が四年生のとき、福士幸次郎が、国語教師として着任した。そのとき福士は三十七歳。すでに詩人として、中央詩壇の重鎮であつた。着任の時のようすを、官一は「秋の陽ざしの中を、先生は煙草をプカプカふかしながら、裏門から悠然と入つて来られた。その姿を、私たちは教室の窓から眺めながら、驚嘆した。私たちはキリスト教の掟にしばらく暮らしていたので、教師といえども、キャンパス内で悠々と煙草をふかしている、自由な先生の姿になかば呆氣にとられ、なかば憧憬のまなざしを送つたのである。」と

書いているが、この出会いが、本格的な官一の文学開眼につながり、福士を生涯、師とすることになる。

官一たちは、福士の着任したその日から、「文学の研究会を開いてください。」とせがんだ。そして週一回の文学研究会が開かれるようになるが、やがて官一たちは、雑誌『わらはど』を刊行する。『わらはど』の命名は福士によるものである。同人は今井富士雄、奥田啓二、古川英雄、木村繁^{しげし}、成田三男^{なめかた}、行方薫^{まかなえ}、蒔苗忠男^{まかなえ}、三上斎太郎^{さいたろう}、柳田英治^{えいじ}、それに今官一である。

ガリ版刷の創刊号が出たとき、官一たちは喜び勇んで、第一番に福士先生に見せにいった。すると福士は、眉をしかめて、「青年というものは、もっときれいな仕事をするもんだよ。」

といったという。のちに官一は「よつぽど刷り上がりのきたない雑誌だったのだろう。しかし、このときいわれた先生の言葉は、私の一生の指針となった。青年よ清くあれ、と私はいまもそう思っている。」と書いているが、些^{ささい}細な師の言葉から、身の処し方を考える、官一の素直さに心うたれる。

福士が東奥義塾で教えたのは、半年余にすぎなかったが、生徒たちに多くの影響を与えた。作家としての今官一を育てただけでなく、『わらはど』同人は、のちに大学教授、医師、新聞記者、音楽家、教育者、詩人など、みなひとかどの人物になったのである。

一九二七年（昭和二）四月、義塾を卒業した官一は、早稲田第一高等学院ロシア文学科に入学する。進学のため、上京する官一を、福士は

青森駅に見送りに来た。和服の尻しりつばしよりをし、ゴム長をはいて、びちゃびちゃとみぞれの道を踏みしめながら送ってくれた福士の姿を、官一はいつになっても思い出した。

福士は口ぐせのように、

「万葉集と唐詩選を読みなさい。」

といったが、官一はこれだけは決して忘れることなく、その死去するまで座右ざゆうに備え、読み返した。

「思えば、そしてこれだけが、先生の教えに忠実な、ただ一つの実行になっている。」

と官一は、その思い出の中に書いているが、この師弟愛には胸をうたれる。

上京した昭和二年のころから、官一は小説を書きはじめた。「書き換へられた運命」「パン屑はまだか!」「町と喇叭らっぱ」などである。それらは習作として、津軽書房発行の『今官一作品』上巻に載せられているが、叙情と理知に彩られたそれらの作品は、到底十八歳の青年の作とは思われない出来栄えである。しかも、驚くべきことに、後年の完成された官一の作品に見られる、独自の文体がそこに発見できることである。

一九三〇年（昭和五）、官一は大学を中退して、弘前に帰った。作家として立とうと、創作に没頭するためである。弘前に帰って間もないころ、官一は、友人で詩人の白戸郁之介しろといくのすけの紹介で、九州帝大の学生井上靖やすしと知り合った。井上の父は弘前第八師団の軍医をしていて、弘前

に居住していた。井上は家族と一緒に正月を迎えるため、弘前に来たのである。

官一、白戸、井上の三人は会ったとたん意気投合して、『文学ABC』という同人雑誌を刊行することになった。編集は官一が担当し、白戸と井上は詩を発表、官一は青木了介のペンネームで「嬰兒の父の歌へる」を発表した。『文学ABC』は、ほどなく廃刊になるが、同人の井上靖はのちに芥川賞を受賞し、官一は直木賞を受賞している。いま思うと、なんと豪華な顔ぶれの同人と見えるが、当時はもちろん、二人とも無名の文学青年だったのである。

同じ年、官一は、作家になるための本格的な勉強をしようと、再び上京する。中野区野方町のかたに居を構えたが、その家は師福士幸次郎の隣で、二人の交流は頻繁ひんぱんになる。

そのころ、作家として売り出すには、同人雑誌を発行し、それに作品を発表して、世間に力量を認めてもらうしか方法がなかった。考えを同じくする者が集まって発行する雑誌を同人雑誌というが、雑誌発行の費用は、同人各自が負担する。作品を書くだけで大変なのに、雑誌発行の費用の工面くめんをしなければならず、作家修行は並大抵たいていでなかった。同人のなかには苦しきのあまり、脱落するものもある。あるいは同人たちの意見が合わず、解散することもある。

上京した官一も、さまざまな同人雑誌の同人となって、作家としての腕を磨き、苦労を重ねるが、以下、年表からそれを誌す。

一九三三年（昭和八）二十四歳。古谷綱武ふるやつなだけらと『海豹』かいひょう創刊、太宰治を同人に加える。「蒸気」を發表。翌年脱会す。

一九三四年（昭和九）二十五歳。太宰治、壇一雄、山岸外史がしらと『青花』創刊、編集責任者となる。「三つの祈り」發表。第一号合評会を新宿「モナミ」に開く。席上、議論沸騰し『青花』解散となる。その後『日本浪曼派』にっぽんろうまんぱに合流。

一九三五年（昭和十）二十六歳。十二月「海鷗の章」かいおうを『作品』に發表。朝日新聞「豆船艦」で好評を得る。「豆船艦」は当時の最も権威あるコラムであった。

このように、勉強と苦勞を重ねて、官一の小説は次第に人々に認められ、読者の支持を得る。官一の小説は、選り抜かれた言葉と独自の文体でつづられていた。それだけに、その小説は「玄人好みくわうじんの文学」といわれ、文学に造詣深い人々に高い評価を得た。

そして一九三八年（昭和十三）、『文学汎論』に連載された官一の「旅雁の章」タブツバカル「雷鳥の章」フミライ「和人埋葬（朱実の章と改題）」アトニは、芥川賞候補となった。候補にはなったものの、官一をこころよく思わなかった一審査員の反対で、受賞することはできなかった。このような場合、落胆したり、身の不運を嘆くのが普通だが、官一は恬淡てんたんとして、動ずる色もなかったという。官一は文学によつて名利を求めず、ひたすら小説を書く喜びだけを求めた作家だった。

一九四一年（昭和十六）十二月八日、太平洋戦争が勃発した。この日は奇しくも官一の誕生日である。日本中は戦争一色となり、文学など顧みる余裕もなくなった。そのころ、官一は鉄道省観光局に職を得て、雑誌『観光』の編集に従事していた。そのかたわら、さまざまな雑誌に文章を書いていたが、戦局が苛烈かれつになるにしたがって、それらの雑誌も次々と廃刊になった。また、自由にもものを書くことができない状態となった。作家として、自由にももの書けないくらい、辛い、苦しいことはない。官一は絶望的な毎日を送っていた。

一九四四年（昭和十九）四月、官一のもとに、召集令状が届いた。召集令というのは、政府の命令によって、軍隊に入隊することで、戦争中に出されるのである。

このとき官一は三十五歳だった。普通、召集は三十歳くらいまでの青年に出されるのだが、十九年当時、戦争のために若い男子が少なくなり、ついに、三十五歳の壮年までが、召集されたのである。

三十五歳の老兵、今官一は、ただちに横須賀海兵団に入団し、戦闘に参加すべく、水兵としての猛訓練を受けた。そして翌一九四五年、海軍二等水兵として、戦艦「長門」に乗り組んだ。日本の中で窒息ちっせくしそうになるより、軍艦旗のもとで死ぬことを、官一は願った。しかし、水兵としての官一は、誠心誠意義務をつくした。そして、目まぐるしい艦内生活の中で、官一は所持した小さなノートに、艦内の出来事を細大もらさず、克明に記入した。その努力執念もさることながら、これは書かずにおれない作家の宿命でもあったろう。

このような官一の行為は、やがて艦内乗り組み員の理解を得るようになった。「お前食え」とぶっきらぼうに配給の菓子をゆずってくれる兵曹がいたり、美しい皮表紙のノートをくれて「軍機に触れないかぎり、存分に記入したまえ」と好意を示す少尉候補生がいたりするのである。

戦艦「長門」は、フィリピンのレイテ沖海戦に参加する。僚艦がすべて撃沈されるなかで、「長門」だけただ一艦、母港横須賀へ帰投する。そのとき、乗り組み水兵千二百人のうち、生き残ったのはわずか三十数人だったという。さいわい官一は、生き残った。しかし、彼の最愛の母は、彼が「長門」乗り組み中に亡くなっていた。

官一は、この体験を『幻花行』『不沈戦艦長門』に生かした。戦争と軍隊を書きながら『幻花行』ほど、静かで、美しい小説は、他に類がない。そして、この名作が、亡き母と戦艦「長門」に捧げられているのも表徴的である。『幻花行』を発表して以来、官一は『壁の花』『牛飼いの座』など、次々と秀れた作品を発表した。『壁の花』では、一九五六年（昭和三十一年）の直木賞を受賞した。しかし、今官一はついに流行作家にならなかった。

普通、直木賞など受賞すると、出版社からの執筆注文が次々と来るのが常である。事実、官一にも有名出版社から、続々と注文が来た。しかし、官一は、自分が書くこうとしている小説、自分が書きたい小説以外、絶対に書くこうとしなかった。ここに作家としての今官一の真骨頂が

ある。

今官一は、その小説作法でいっているように、「物ごとが不当に扱われることを好まず、力をつくして、それらの処遇を正当化すること」を、小説活動の唯一の目標とした作家である。このような高邁な理想を持つ作家が、どうして出版社の注文通り、売るための文章が書けよう。

彼は、そのような文章を書こうともしないし、また、書けない作家だった。

官一はその夫人公恵きみえに、

「理想というものは現実にはないかもしれないが、おれは理想を捨てないぞ、というのが自分の理想主義だ。」

と語ったというが、彼はその理想に忠実に生きた作家であった。

一九七九年（昭和五十四）十月、官一は脳梗塞のうこうそくにたおれた。その後、小康を得たが、言葉を出すことができず、物のみ込むことができなかつた。看病していた公恵夫人が、ある雑誌を読んでいた時、言葉が話せなくなった病人に、第一母国語を聞かせたら治なおった、という話が出ていた。

「官一にとっての第一母国語は津軽弁だ。」

そう思った夫人は、一九八〇年（昭和五十五）一月十二日、車椅子生活の官一を、故郷弘前に連れ帰った。

弘前に帰った官一は、夫人と小野淳信あつのぶ医師の手厚い看護によって、徐々に回復していった。そして、車椅子の生活の中、口述しながら文章を書き続けた。

一九八三年（昭和五十八）三月一日、今官一は急性肺炎で七十三歳の生涯を終えた。東京を出発のとき、半年ももたないといわれた彼が、三年半も生き続け、仕事を続けることができたのは、第一母国語の津軽弁の中での生活が、彼に力を与えたからではなからうか。

今官一は、生家蘭庭院の墓地に葬られ、戒名は「幽玄院純文官光清居士」という。

参考文献

- 今官一著『KONKAN津軽ぶし』一九六九年（昭和四十四）津軽書房
今官一著『今官一作品』上・下 一九七九年（昭和五十四）津軽書房
今官一著『思い出す人々』一九八三年（昭和五十八）津軽書房
今公恵『今官一を語る』新聞記事 一九九一年（平成三年）陸奥新報社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、三二六・三三九頁